

## 5 企業のこえ

NHK中国本部・人事部にきく

NHKでは地方公募という形で広く全国から人材を求めています。その採用を判断する基準や方針はすべて東京本部の意向で決定されます。したがって地方が独自に採用する人物を主体的に決定することはありません。それでどういう方針で決めるのかということをおしはしはし申し上げることはできないのですが、まあひと口に言えば知力・体力共に備わったバイタリティのある人がやはり第一でしょう。詳しくは先日の「週刊朝日」の就職についての記事や角間さんという人の書かれた「人事部長」という本を御覧になれば、NHKがどういう人物を求めているかわかっていただけるとおもいます。放送に

限らずマスコミ一般では、特定の分野に偏らない幅広い知識をもった人間を必要とします。それで特にマスコミに有利な専門とか学部といったものはありません。NHKではほとんどの大学と学部で求人票を送って門戸を広く開き、大学や学部で左右されることなく公正な方法で採用を決定します。総合科学部は今年初めての卒業生をだされるそうで先生方も熱心に説明に來られました。残念ながら合格者こそ出ませんでした。幅広い知識をもっているという点で、他の学部で較べマスコミ向きの有利な面があるのではないかと印象をもっています。(文責・編集部)

## アフリカからの通信

—土井敏邦 アフリカを彷徨—

地域文化コース4年 藤谷 昌平

土井敏邦 比較文化研究4年 現在休学中

土井君がアフリカへ渡ってから早や8か月が経った。なぜアフリカに行ったのかというその本意は本人にしか解らない。高度に発達した文明社会の中で、ただ流れるままに身を委せている自分への腹立たしさに端を発し、生活環境が極限状況とわれわれの眼に映るアフリカに飛び込むことで自己を厳しくみつめられると彼が考えたのではないだろうかと思像するだけである。ただ今回のアフリカへの渡行は彼の人生にとって大賭博だったことは確かである。

海外に出ていった例が、わが学部にもいくつかあるが、彼の場合、完全なる単独行動でありしかも生命の危険と常に背中合わせの地を選び、ほとんど現地の人々と寝食を伴にした旅を続けているという点で異色なものである。「国際的な感覚と実行力」をもち「国際社会に広く活躍」しようとした最初の同朋であるといえよう。

行く先々で暖かく迎え入れられ、村人と生活を伴いしながら感じた驚きやアイデンティティが書簡で送られてきた。フィールドワークといえるか否かはわからないが、彼のアフリカ渡行の概略を知って頂くことで、何かの示唆になれば幸いである。

彼が計画を実行に移しはじめたのは二年生も半ば

過ぎてからのことだった。問題は外国語の会話力と資金の調達であった。英会話は知り合いの縁で岩国の米軍基地に出入りすることで実践力を養っていた。また資金は三年次の大半をバイトに費した。尚且つ、アルバイトをしながら未知の世界の情報を学外のさまざまな人々からも得ていたようである。その中でも特筆されるのは一昨年の夏、北海道の牧場でのアルバイト料を元手に敢行した日本縦断ヒッチハイクであり、「世界ケチケチ旅行クラブ」の例会への参加であったと思う。集められるだけの情報を自力で集め「ただの旅に終らせたくない」との理由から「ヒロシマ」を理解してもらえればと何冊かの英語版写真集がリュックの中にあつたことが記憶に新しい。



ワーク・キャンプで作業中の土井君(左端)

大学当局の許可もやっと取れ、当初の予定よりやや遅れて5月28日、無事羽田を発った。バンコク(タイ)、ボンベイ(インド)を経由して6月8日、ナイロビ(ケニア)に降り立った。

ケニアをバスとヒッチで回り、7月5日、西アフリカ方面へ出発。ウガンダ、タンザニアを回り再びケニアに戻り、8月初旬よりワークキャンプに参加する。3週間のキャンプを終え、キャンプで知り合った青年教師宅にお世話になる。その後、ウガンダ、ザイールを経由して現在(一月中旬)サハラ砂漠横断中である。この間に彼はアフリカのヒトラーと異名をとるアミン大統領や、ケニアに残る部族主義などについて、われわれがはじめて知る生の声を送ってきてくれた。その一部は新聞、週刊誌というマスコミにも取り上げられたことは周知のことである。

彼の通信のすべてをこの限られた紙面に掲載することは不可能なため、トピックスを編集してお伝えしたい。

7月5日付で来た第一便はナイロビから発されたものである。われわれが抱いているアフリカのイメージとは全く異なった近代的ビルが建ち並ぶ広島よりも小じんまりした街、それがナイロビである。到着以来ヒッチとバスでケニアを回って、農家にも数日宿泊した。農家は土壁で囲まれた土間の家、飲料水は雨水、灯りはランプ、朝食はチャイ(紅茶にミルク、砂糖をたっぷり入れた飲みもの)だけ。昼食、夕食はポテトとメイズ(とうもろこし)を煮たもの。家の中でたき火を燃やし長時間煮込めるのを待ちながら家族の者が談笑する。「贅沢な生活を知らなければ人間はこんな中でも、これ程明るく生きていけるものなのか」と彼は驚いた。

ごく稀にしか車が通らないヒッチ旅行の中で彼ははじめて触れたアフリカの土の匂いだったのである。「これからどんなことになるか予想もつきませんが、できる限り部落滞在を繰り返していくつもりです」と抱負を語ってくれた。

8月初旬、彼はワークキャンプに参加した。3週間\$60を自分で支払って参加したケニア国内のナミラマという町の女子高校を建設する奉仕労働である。デンマーク、オランダ、カナダおよびケニア国内の青年たちと唯一の日本人との計15人のキャンプが張られた。

食事はすべて原地食。とうもろこしに始まり、とうもろこしに終る食事には閉口したようだ。

外国人の珍しい訪問者と話しをしに村人たちが連

日訪ねてきた。ケニアは公用語が英語で、現地の人々はとてもうまくこなすらしい。彼らの知っている日本は「トヨタ、ダットサン、ナショナル、サンヨー」と「カラテ」の国「ニッポン」らしい。ウガンダ、タンザニアにおいても人々はきまってそのことを口にし、それ以外は全く知られていない。

キャンプの始まる前に知り合った小学校の先生に頼まれて、仕方なく小学校の教壇に立ったそうだ。めったに見ることのない珍しい日本人が日本の話をするというので生徒たちがどっと押し寄せてきた。日本から持参した唯一の写真集「ヒロシマ」を使って原爆の話をするに、世界地図を書いて日本の位置を示したとか。以前ある少女から「日本はアフリカのどこにあるの」とおかしな質問を受けた彼の経験のなせる思いつきだった。



農家の新築 (ケニア)

ヒッチをしながら行き交う人々に「ヒロシマ」を知っているかと質問を繰り返す。「ああ歴史で習ったよ。原爆のヒロシマだろう。」と彼の会った大部分のアフリカ人がヒロシマの名を知っているのに驚かされた。しかし、アフリカには世界のことよりもまず自分たちの生活という切実なる問題があるようだ。「ニッポン」を口にする度に感じたようである。

ナミラマの村人たちの挨拶についての記述は興味をそそる。人に会えば「ムレンベモノモノ」(ヴニャラ語で「こんにちは」の意)と挨拶を交す。あいさつを済ませたすぐ後であっても再び出会えば「ムレンベモノモノ」と握手を繰り返す。習慣とは恐ろしいものだと関心していると、彼も御多分に洩れず「ムレンベモノモノ」の大歓迎を受けて少々うんざりした。

ケニアでは男は何人妻を持ってよく、その数で男の格が判断される傾向のようで、異母兄弟が仲むつまじくしている様子は二十世紀の日本人には異様に映った。

自分のキャンプでは仕事は捗らず、おしゃべりに夢中である。特にヨーロッパ人がひどく、極端なのはベッドに寝ころがっているありさま。因に土井君とはといえば、セッセッセと日本人らしく振舞ったそうで、風邪を引いたのがきっかけでしだいに労働意欲を失ったようだ。日本でワークキャンプ開催を実現したいと考えている彼の3週間の生活が過ぎていった。

日本出発以来3カ月が経った当時、ホームシックは相変わらずで、夢の傾向もふっくらした御飯や寿司、すき焼きなどが登場してくるようになった。

その間に、ウガンダ人の青年教師アマンガレさんと接触し、ウガンダの内情を聞く機会を得た。アマンガレさんはウガンダからの亡命者で、すでに二人の兄弟を秘密警察に殺害されていた。土井君の質問に回答するという形式で約30ページにのぼるレポートが送られてきた。アミンの暴虐ぶりが克明に記されており、某テレビ局が報道したアミンの姿とは似ても似つかぬものである。

ナミラマを離れた後、ワークキャンプで知り合ったケニアはマチャコス地方の青年教師宅に身を寄せた。村人を訪ねたり、学校の教壇で日本の話をしたり(計6回)の生活を続けた。

滞在中運よく結婚式がこの村であって特別ゲストとして招待された。スーツと白いウエディングドレスの新郎新婦が教会で式を挙げるという姿に伝統的な結婚式を期待していた彼は落胆したようだ。結婚式の模様がとてもユーモラスであったので原文のまま紹介したい。

西洋式に教会で式を挙げた後、新郎の家の前の広場で村人たちが新郎新婦に贈りものをするのである。ある者は手製のバスケットを、ある者は生きた鶏を2羽……。しかし多くは金を贈るのです。ただ日本と違って贈られた金は贈り主の名とともに、村のチーフによって公表されるのです。特別に招待された僕も5シリング(200円位)を贈ったのですが、唯一の外国人の贈りものというので村のチーフが、ひととき大きな声で「日本から来たトシノ(アフリカでは僕はいつもこう呼ばれるのです)5シルノ」と公表すると村人たちから大きな拍手が起こり、僕はすっかり照れてしまいました。こんなことなら10シリングくらい贈っておけばよかったと思った程です。

キャンプのあった地方と異なり、マチャコス地方は乾燥地帯のため水が大きな問題であり、小学校の運動場の端の「ポンプを利用した湧水」が生活に利用されている。気ままな湧水はしばしば涸れ、遠くから白く濁った水が運ばれている。彼もアフリカでの生活にすっかり慣れ、この頃には濁った水を飲むことにも平気になっていたようだ。

ケニアの教育制度は初等学校7年、中等学校6年、大学3年、ただし法・工は4年、医学部は5年で、ナイロビ大学が唯一の総合大学である。中等学校は国立と公立・私立の二種類に大別され、設備や学費の面で国立の方がかなり優遇されているようだ。授業はスワヒリ語の講義以外すべて英語で行なわれており、彼があつかましく出席した感想によると授業内容はそれ程難しくないらしい。

家族については兄弟のひとりが職をもって独立すれば、弟や妹は兄の世話をするのが常識となっている。彼が世話になった青年の弟も、食卓の上のランプの灯の下で勉強しながら、食事や洗濯をして兄の面倒をみていたのであった。彼ら中等学校生の職業志向は男女とも日本の場合と大差はないらしいが、ケニアの貧しい農村から抜け出したいという都会志向がかなり強い。

ケニアはアフリカにおける数少ない平和な国家のひとつとみていたが、実際はかなりきびしい部族主義があるようだ。現在、政権は主要部族であるキユク族によって掌握されており、他の部族には全く閉ざされた社会なのだ。他部族はケニヤッタ大統領政府について自由に語ることは許されず、権力によって沈黙させられている。独立はできたが、多数派部族が利害を独占するため部族間の貧富の差が大きく開き、政治的差別も手伝ってキユク族に対する反感が生じてきており、動乱に発展する可能性がなきにしもあらずといった現状である。このような会話も寝



背中にこぶのある牛(マチャコス地方・ケニア)

室に閉じ込めなければならない状態だそうである。トライバリズムは近代的な国家を生み出すためにアフリカ人が避けては通れぬ陣痛なのかもしれない。

9月末、ケニアを離れ、アフリカ大陸を横断すべくウガンダを経て10月も半ばザイールに入った。交通の便もなく足は飛行機と運送トラックだけ。やっとイシロまでたどりついた。肉体的にも精神的にもストレスが蓄積しているようだ。会話も仏語が中心となり、かなり苦しんだのではないかと想像する。ここザイールでは教師の給料が60ザイール(約\$30)でシガレットが一箱なんと\$1もする。ドルとも両替してくれる銀行もなく、現地通貨は修道院のシスターらにお世話になった。イシロを後にしてカメルーンに入り、サハラ横断に挑んだ模様である。

ヨーロッパに抜けて帰国の途につくものと思われるが、彼が最も期待していたひとつ、ランバレネ・シュバイツァー病院についてのレポートが待ち遠しい。

パック旅行と異なり行き当りばつりの旅であるため、彼の報告は意外性に富み、実に生々しく知られざるアフリカについて知らしめてくれた。原地の部落へ入り込んで、ブロークンイングリッシュでしゃべりまくっている<トシ>の姿が目に見えてくる。

彼は今、サハラ砂漠の真只中に居るはずだ。ひと

り夜空を見上げては故郷に思いを馳せ、「すき焼き」の夢を見ていることだろう。

長いアフリカまでの道程であったが、遂にアフリカの地に足を下し、さまざまな人々と交流しながら大砂漠の中をヨーロッパへと向かっている。帰国後彼はその貴重な体験を詳細にレポートしてくれるだろう。それが彼にとってのゴールではなく、必ずや新しいスタートラインとなるにちがいない。四年の歴史しかない総合科学部であるが、創世紀にして世界へ翔いたこんな男がいることを記憶の片隅にでも残しておいてもらいたい。どうか<トシ>が無事帰広してくれることを願いつつペンを置く。

#### 《地域文化研究室宛に送られてきた資料》

##### ・カセットテープ巻

カンバ族に関する風俗、習慣について酒場で老人に聞いたり、120才を越える長老を尋ねて聞いた話をジャクソン氏が編集して吹き込んでくれたもの。

##### ・ケニア、ウガンダ独立前後に関するもの

書物より資料を集めジャクソン氏の学校の秘書にタイプしてもらった。

##### ・亡命者アマンガレさんのウガンダ内情告発レポート

##### ・“Target Amin”, ペーパーバック一冊

## ブロイラーの鶏となるなかれ

4年 石井 直人

4度目の冬を迎えたが、私の生んだ卵はどういうしろものであったのだろうか。ずいぶん生んできたと思うのだが、みんなもっていかれてしまった。殻うすく、味うすく、胚うすく、食うに耐えないものだったかもしれない。しかし、まがりなりにも、私はこのブロイラーの養鶏場をよくぬけ出していった(ぬけ出していこうとする)鶏であったから、味の濃いやつも、五、六個ひり出しただろう。

ふんづまりの1万余羽の鶏友よ。配合し料の同じえさを与えられ、口ばし切られ、羽切られ、四六時中の人工太陽の牢獄に住む鶏よ。何羽があそこにおらさがつている「太陽」が実は安ものの裸電球で、ここが「楽園」という名の牢獄であることに気づい

たか。何羽がへしおれた口ばしで主人のすねと頬をつついたか。何羽が養鶏場をつきやぶって戸外に飛んだか。知っていたか。一月に一度、薬会社のやつらが抗生物質を我々にうつために主人に薬をもってくるのを。我々の身体は肺病やみか、さもなくば無菌状態である。主人の犬のひきかきで昇天だ。主人は、同じ格好のうそ卵を生まして金にすることだけを考えているのだ。商社のやからと共に。見ろ、やつらのあの金菌の光りを。

卵がうそ卵であることを知るより大切なこと——我々のときかの中につまった脳みそが、全く同じひな型になっているということだ。パイ、パイ。あそこを見よ。白地に赤く「愛」と染めぬいたチャンチ